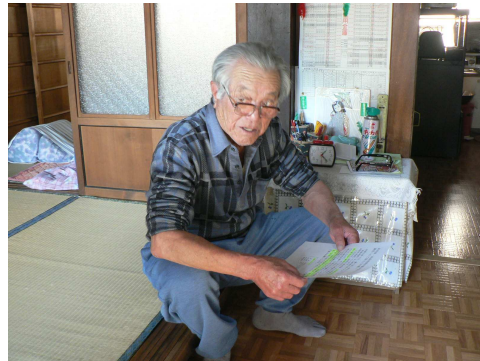


## 昭和の南海地震体験談

氏名: 佐々木 元次郎(ささき もとじろう)  
生年月日: 大正15年1月22日  
地震を体験した場所: 日高町・自宅寝室  
当時の家族状況: 父、母、弟2人、妹1人



### 1) 地震発生時の状況

自宅2階寝室で就寝中に強い揺れが起こり、目を覚ました。すぐに起き上がり、揺れている最中に1階玄関に行ったが、引戸が開かず奥座敷の掃き出し窓を開け、庭に出て、揺れが収まるまでそこに居た。揺れが強く、歩くのが困難だったが、外に出なければと思っていた。

### 2) 津波襲来時の状況

揺れが収まった後、近所の老人2人が訪ねて来たので、玄関の引戸を開けて中に入った。地震の際に開かなかったのは不思議だと思うが、あまりにも揺れが強かったのだと思った。老人2人と話し中に、浜の方から「津波やー」の音が聞こえたので、老人達を連れて山手の道に避難した。その時、表の道には水が増えつつあり、危険と判断したので、2階の窓から裏の道に降りた。窓の下にちょうど良い塀があり、そこから道に降りたが、老人2人を降ろすことに時間がかかり、すねまで水が来ていた。

坂道の水際で様子を見てみると、同じような水位で3、4回水が来た。津波は静かにヒタヒタと水が増え、引く時はザーツという感じだった。地震＝津波とは「稲むらの火」の話をよく聞いたので連想できたが、「まさか」と思っていた。

### 3) 家族の行動・被害

両親は「津波」と聞いてすぐに幼い弟2人と妹1人を連れて高台の道路へと避難した。その時はまだ表の道には水が来ていなかったもので、濡れずに表の道から高台に行けた。

午前中に津波は収まったので家族全員が自宅に戻った。1階部屋の床上90cmの所に水に濡れた跡が付いていた。両親や幼い弟達は1階寝室で布団をそのままにして避難したが、どこも濡れていなかった。床板ごと浮き上がったようである。タンスや物が乗っている畳は濡れた。物の流失は無く、また地震の被害も無かった。

### 4) 集落・周囲の被害

地面の低い地区なので、周辺の家屋は全部浸水した。住民に死者・けが人は無かった。最後の水が引いた後、自宅前の四つ辻に燃料入りドラム缶が2本と大きな材木が残されており、津波がもっと来ていれば、周辺の家を壊してしまっただろう。地震で倒壊した家屋は無く、被

害は無かった。

#### 5) 地震・津波後の生活

片付けをしながら、自宅で生活した。当時、漁師をしていたが、漁期ではなかったので、片付けに専念できた。水は元々から山手の共同井戸を使用していた為、特に困ったとは思わなかった。食料は今ほど貯蔵できる物も少ないし、畑から出来た物と海で獲れた物を食べていた。地震が起きる前と後で生活が変化したかどうかは覚えていない。特に記憶に残っている事柄は無し。

#### 6) 次の災害への備え

避難訓練に参加している。